

みやざき子ども未来応援フォーラム2020 報告

2020年1月25日(土)に宮崎大学木花キャンパス・創立330記念交流会館コンベンションホールで「みやざき子ども未来応援フォーラム2020」を開催した。

このフォーラムは、平成31年度宮崎市市民活動支援補助事業の一環。子どもの貧困に向き合う多様な職種の参加者が、関係諸団体の役割と機能を互いに理解する学びの場として行った。参加者は午前の部56名、午後の部62名である。

1 教育講演「はみ出したキャリアの歩み方」

講師は五常・アンド・カンパニーのヴァイス・プレジデント菅井夏樹さん。「はみ出したキャリアの歩み方」と題し、「誰もが努力できる世界をつくる」というビジョンを見つけるまでの過程と、現在のキャリアを語った。最初に、このビジョンを見つけるまでの転機となった4つの出来事を説明した。

1つ目は「甲子園への出場」。二度の甲子園出場を経験しているが、そこは日本全国から野球推薦選手が集まる場所。唯一の一般受験を経た選手として、諦めずに努力し、夏の甲子園でベンチ入りし、ベスト16に貢献した。生活の全てが野球中心だったこの時期に「努力する機会があれば夢を実現できる」ということを学んだ。野球を続けるには想像以上のお金がかかる。両親の理解と協力がなければできなかったとも語った。

2つ目は「自分を見失った」。プロ野球選手にはなれないと諦め、大学に進学。今までできなかったことは多く、髪を伸ばし自由な時間を手にいれ、まずは六本木で遊び続ける日々を送った。それはそれで楽しかった。しかし、東日本大震災が発生し、自分にできることはないかと考えた。震災発生後の2、3日後、菅井さんは仲間に「募金活動をしないか」と呼びかけ、2日間の募金活動で50万円を集めた。また、現地に5、6回訪れ、誰かのために何かをすることの大切さを感じられた。この経験は「迷ってもいい。まずは行動を起こす」ということとして今も指針となっている。

3つ目は「ラオスに学校を建設した」。菅井さんはSNSに「学校を建てたい」という熱い思いを綴り、賛同した多くの仲間が集まった。大使館やラオス政府との交渉を経て、2年間でラオスに3校の学校を建てた。この経験は「仲間の力を結集すれば、少しでも誰かの役に立つことができる」という確信になった。また、「誰かにできることは自分にもできる」ということを感じられたという。

最後は「半年で会社を辞めた」。大手企業に就職したが、ラオスに学校を建てたことで子どもたちや母親の役に立ちたいという思いが強くなっていった。このまま働いていても自

分のやりたいことにつながらないと、わずか半年で退職した。温かく指導してくれた職場に対しての敬意は今でも変わらず「一生、このブランドのものを身につける決意」だという。菅井さんには、後悔したくないという思いが強い。「選択に失敗してもやり直せばよい」と語った。

題名に「はみ出したキャリア」とあるように、人とは違ったことを考え、行動し、予定通りにはいかない歩み方について、多くの参加者は真剣なまなざしで聞いていた。

また、現在勤めている五常・アンド・カンパニーのビジョンは、自分の人生ビジョンと強いつながりがあるという。民間型の世界銀行になろうとしている会社と、年内にラオスにもう1校を建てようとしている個人の目標のために、努力を惜しまない日々があるだけだ。

最後に、「自分のために生きているか」という問いがあった。このフォーラムには高校生や多くの大学生が参加していたこともあり、27歳の菅井さんの姿は、参加者にとって大きな刺激となり、自分自身を見つめ、今後の人生について考え直す機会になった。



2 講演「地域共生社会におけるスクールソーシャルワーク

～チーム学校の可能性と課題～

講師の丸山涼子さんは元寝屋川市立和光小学校校長として大規模な学校改革を実行された。それは退職された現在も、全国からの視察が絶えない不登校ゼロの学校である。解説には丸山さんが校長であった時期に、同校のスクールソーシャルワーカー（SSW）だった佐々木千里さん。

丸山さんは、SSWを活用しながら、子どものつまずきの背景や学校の課題などを明らかにした。学校の荒れ、不登校、学力低下、生活習慣など問題を具体的に分析し、どんな仕掛けを作るかを考えた。まずは学力より子どもたちの安全安心対策に取り掛かる。それは「どうせ」「だって」「ムリ！」思考の子どもたちや、疲れ果てた先生に直接的に変化を求めるのではなく、地域との連携システムを構築することだった。校区の福祉委員や自治会

長、民生委員などとともに、気になる子どもがひとりぼっちにならないための声かけを続ける。「今日はここを褒めてあげて」「今日はこんなことで声をかけて」と日々具体的な話題を提供し続けた。

学校内では、気になる子どものケース会議を毎週定例化し、他の学校行事よりも優先して行った。SSWによる教員の基礎研修を継続して行い、ロールプレイ研修などを取り入れて、先生が一人で抱え込まない組織を作り上げた。また、コーディネーターという困りごと担当の先生を決めることで、学校内の情報が集まるシステムにした。

改革当初は、先生からの諦めの声や時間的なことへの苦情などがあったという。しかし丸山さんは、「人がやるのではなく、組織で動き、システムを残す」という大きな目標を掲げていた。その実践の中心となったのがSSWと連携することだった。「困った子」が「困っている子」へと教師からの見方が変わり、ケース会議でアセスメントを繰り返すうちに子どもを見る目が鍛えられていったという。

最後に、その過程をともに経験したSSWの佐々木さんが、和光小学校は人の力を引き出して好循環を生むシステムを残したとまとめられた。

お二人の視点は、常に子どもに対する個別の問題解決ではなく、長期的かつ包括的だった。学校は学力を、躰は家庭でという枠はなく、まち全体が子どもを育てる一体感を感じることができた。

3 分科会

分科会① 講演「見えづらい貧困や虐待のサイン」

講師は日本社会福祉事業大学教授の金子恵美さん。はじめに、統計資料を用いて子どもの貧困の本質を捉え直した。子どもの貧困は連鎖するだけではなく、累積していくことにより重篤な問題を抱えるという。その家庭は閉ざされたまま、支援を求めることはない。生きにくさ、暮らしにくさを抱える人々の声に耳を傾け、困りごとを具体的にし、伴走支援を行うのは、実は地域だとなげた。

支援には流れがあり、関係機関によって介入できる内容にも違いがあるという。ストレングスエンパワメント（地域が持つ強み）を知り、専門機関を活用することも重要だと説いた。

最後に、支援を求めない親子が描いたNHK総合ドラマ「サイレント・プア」を見て、その親子がその後どうなっていくかを想像した。支援には緊急性が必要なこともある。自分が担当者だったらと想像することで、地域社会の一員として主体的に考えることができ

た。また家庭とともに問題に向き合うときには、その親子にとってより良い生活を守るためという夢を描くことも、支援をする側に必要であると語った。個人に問題があると捉えるのではなく、問題を起こしている背景や仕組みに目を向け、ともに変えていく姿勢を学んだ。

分科会② 講演 「学校はSSWをどんなときに活用できるのか」

講師は京都市、寝屋川市等スクールソーシャルワーカー・スーパーバイザーの佐々木千里さん。県内外の教職員やSSWが参加してクローズド形式で行われた。

まずソーシャルワークの専門性が、学校と関連機関、教職員、子どもと保護者、地域と支援団体など多くを結ぶことができると紹介した。具体的にはアセスメントシートを活用して支援計画や記録から子どもの変化を理解し、ケース会議によってチーム学校を具現化していくものだった。ソーシャルワークには全体を俯瞰しながら、子どもの最善の利益や子どもの意見を尊重することも必要。現在起きている問題には過去があり、これから進む未来もある。SSWを学校が活用するのは、学校が福祉的視点とノウハウを取り入れ、支援を具体的に進め、教師自身が学び続けることができる機会だと言われた。元教員の佐々木さんだからこそ、SSWとの協働を勧められるのも理解できた。

佐々木さんの描いたSSWの環境調整・支援対象のイメージ図には未来に向かう子どもや家庭があり、それを学校や放課後教室やプラットホームが守り、その周りを地域や支援団体や福祉事務所など専門機関が包括している。この間をつなげるのがSSWの役割と語り、あくまでも黒子であることが強調された。チーム学校はSSWがいなくても体制が続くことが大切だと語った。



(報告書作成：Swing-By ソーシャルワーカーチーム)